

時空を越えて忍び寄る 奇々怪々な気配

小学生の頃、友達が呼ぶこっくりさんに付き合い、花子さんに怯えながらトイレに行き、口裂け女を撃退する粉を駄菓子屋に買いに走った。そういう類のことはノスタルジックな思い出に過ぎなかった……カンボジアと出会うまでは。

岡田知子 おかだ ともこ / 東京外国語大学

まず、摩訶不思議なブービートラップを仕掛けられ

初めてカンボジアの人たちと知り合ったのは、私が大学生だった1980年代半ばの東京。ポル・ポト時代を生き抜き、難民として来日し定住していた人たちだった。同年輩だったこともあって、すっかり意気投合し、週末ごとに徒党を組んであちこち遊び回っていた。そんなある日、青山一丁目あたりの歩道を歩いていると、リーダー格の彼女が突然、私に向かって叫んだのだ。「危ない！」

車がバイクが接近中、あるいは犬の落とし物でもあるのかと、思わず棒立ちになったが、彼女が私の腕を引っ張って避けさせたのは、道に落ちていた何の変哲もない短くて細い木の枝だった。彼女の説明によると、その枝は、呪術師が念じて私たちを窮地に陥れるための罠、あるいは魑魅魍魎が変現したものかもしれないので、とにかく触れてはならないのだという。日本という空間にありながら、カンボジアの摩訶不思議な世界が広がっていることを知った瞬間だった。

白屋ののどかな風景に漂う妖気に戦慄し

1990年代半ば、私が文学研究のためにカンボジアに長期滞在していたときのことである。休日にカンボジア人の友人とプノンペン郊外の川辺に食事に行った。せっかくなので観光がてら、近くの仏教寺院を訪れることに。正午近くだったこともあり、かなり広い境内に人影は全くなく、異様な静けさに包まれていた。本堂の裏に回ってみると、壁のない長い掘立小屋のようなところに競漕祭用の伝統舟が収納されていた。なんとなく近づいて見てみると、舳先には20センチほどの黒い毛髪束と手のひら大の鏡が取付けられている。乾季の太陽がじりじりと照り付ける中、あたりの禍々しい気配にぞくぞくとする。カンボジアの幽霊は昼間も出ると言われていたのを思い出し、見学もそこそこに寺院を後にしたのだった。

それから20年後。タケオ州の村の夫の実家にいつものように遊びに行き、カンボジア料理と昼寝を堪能した後、プノンペンへ戻るために午後、車で村を出発した途端のことだった。突然、吐き気と腹痛が襲ってきた。車はあぜ道をのろのろ進む。大きな木が一本立っている村の入り口あたりまで来たところで、私は助手席から転がるようにして外に出た。農作業をしていた二人の女性が驚いて駆け寄ってきて、私を凝視しながら恐ろしい様子でひそひそと話している。私はそんなことに構っている余裕もなく、呼吸を整えてやっとの思いで車に乗り直し、シートを倒してなんとかプノンペンまで持ちこたえたのだった。

そして今明らかになるあの気配の正体とは

今回、この原稿を書くにあたって、あらためてそれらの出来事は何だったのだろうと、現地に行っても確かめたくなかった。しかし



妖気を感じた場所にあった舟（筆者撮影、1995年）。右端に写り込んでいるのがコムハエン様の祠。当時、筆者はこの祠の存在に全く気が付いていなかった。



かつて筆者が見たコムハエン号は、鮮やかに化粧直しされているが、すでに現役引退し、保管されている（筆者家族撮影、2021年）。

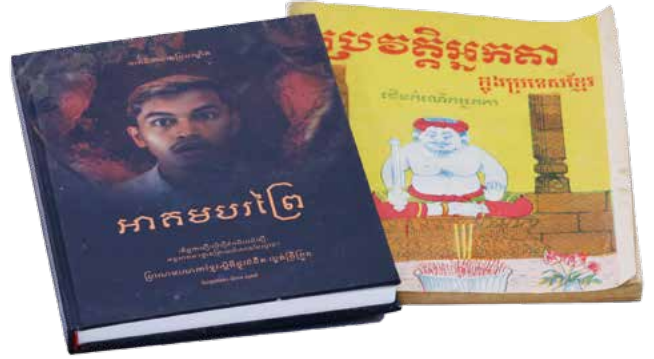




舟の格納庫横にあるコムハエン様の祠（筆者家族撮影、2021年）。妻壁には白猿のお姿が描かれている（左）。祠の中に設置されている2体の像はいずれもコムハエン様（下）。



土地神が登場する人気女性作家によるホラー小説『森羅呪術』（マイ・ソンソティアリー、2018年）（左）と各地の土地神の由来とそれにまつわる儀式やご利益について解説した『カンボジア国内の土地神の歴史』（アマタ出版、1991年復刻版、初版はおそらく1960年代）（右）。



コムハエン様の祠があるプノンペン郊外の寺院（筆者家族撮影、2021年）。

ナ禍（2021年3月現在）にあってそれは叶わない。ということでリモート・フィールドワークを試みた。つまり、カンボジアに帰省したまま、日本に戻れなくなっている夫に調査の代行を頼んだのだ。

まず私が突然、腹痛と吐き気に襲われた場所は、ちょうど村の土地神コン様の宿の木の前だったらしい。内戦のあった1970年代初頭、カンボジア領内に潜んでいるとみられたベトコン掃討作戦が行われた。アメリカが支援する南ベトナム軍の戦車部隊がこの木のあたりに差し掛かると、すべての車両が突然エンストを起こした。村人が慌ててバナナなど供物を用意し祈りを捧げたところ、嘘のようにエンジンがかかったのだという。私の場合も、私が何かコン様の逆鱗に触れたと考えた村人もいたらしいが、私には何の悪意もなかったわけだから、コン様は単に自分の存在を思い出して欲しくて、ちょっかい出ただけ、と夫や家族は説明してくれた。それにしてもコン様も挨拶ひとつしてこなかった私の無礼を随分と辛抱強く大目に見ていてくれたものだ。

一方、プノンペン郊外の寺院は、私のおぼろげな記憶とピンボケ写真を頼りに、でこぼこ道を中古バイクに乗り、数ある寺院の中から特定するのは困難を極めたらしい。夫がようやく目指す寺院に到着したのはかつての私のように正午近く。境内を歩いていた小坊主さんに話を聞こうとすると、ご住職は午後2時までお出ましにならない、舟の由来は村に住む古老に尋ねなければならない、舟が保管されている建物の鍵は別の人が管理している、などなど、容易には真相に近づけない。もはやこれまで、と寺院を辞そうとしたところ、舟の格納庫近くに人影が見えた。最後のチャンスとばかり、その男性に舟のことを聞いてみると、なんと彼こそが鍵の管理者、なおかつ、伝統舟に彩色する職人だった。さらに彼はその村の土地神コムハエン様に対して深い信仰心を持っているという



のだ。30歳を少し出たぐらいの彼が言うには、コムハエン様は猿の姿をしていて霊験あらたかである。なにしろボル・ポト時代には、革命組織が境内にあるコムハエン様の祠の石像や猿神が描かれている妻壁の部分を撤去しようとしたところ、異常な重さでびくともせず、祠はそのまま放置され破壊を免れた。彼自身、妻と幼い子どもを抱えて路頭に迷いそうになったとき、コムハエン様のご加護を願ったところ、寺院の管理や舟の絵師としての仕事を任せられるようになったのだという。帰路につこうとしていた夫はコムハエン様に引き戻されたのに違いない。そういう私は当時、コムハエン様のことなど全く気が付かず、敷地に入ってしまった。あのただならぬ気配はコムハエン様からのご挨拶だったのかもしれない。

かつて東京に仕掛けられたブービートラップは、私がカンボジアに深く関わるようになるための土地神様の布石（石ではなく小枝だったが）だったのか。土地神様たちは時間も空間も越えて、私にメッ



コン様が宿の大樹（筆者家族撮影、2021年）。この木の前で筆者は車を降した。祠は少し離れたところにあるという。

セージを発信し続けてきたのかもしれない。次回カンボジアに行ったときには、土地神様たちの好物のバナナを買って、真っ先にご挨拶に伺わなければ。

